

日本ことわざ文化学会 第9回 大会 大会報告書

文責：中村富美

2018年11月10日、例年、天候に恵まれていなかった大会と違い、朝から秋晴れの中、大会は開催された。東京・御茶ノ水、明治大学駿河台キャンパス、研究棟4階第1会議室・時間短縮形（11:00～16:00）での試みは初めてであった。前年までは、研究棟2階第9会議室で11:00～17:45に開催されていた。今次大会では、理事会で開催場所や時間など、しっかり議論を行い、試みた。懇親会についても場所・時間・費用の検討を行い、2時間から1時間へ短縮形に変更した。参加者から時間不足の意見もいただいたが、最終的には、短縮形での大会は成功と思われる。

午前の部は総会（11:00～12:00）。時田昌瑞氏（ことわざ・いろはカルタ研究家、日本ことわざ文化学会会長）の挨拶の後、議長に蟻川剛氏（公立小学校時間講師）を選出、同氏の手慣れた進行で議事は円滑に進み、2017年度活動報告と会計報告・監査報告、2018年度活動計画案と予算案を承認した。また、新年度の役員として現役員が任期途中で継続されたのに加え、新たに渡辺慎介氏（横浜国立大学名誉教授）が選出された。

総会終了後、昼食・休憩をはさんで、午後の部（研究発表会ならびにシンポジウム）が開始された。

今回の統一テーマは「動物とことわざ」。

第1部・研究発表会（13:00～14:00）

今回の研究発表は、3名で、司会は山口 政信氏（やまぐち まさのぶ、明治大学名誉教授）で進められた。

研究発表① 小森 英明氏（こもり ひであき、武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員）
「ことわざと論理療法～‘案ずるより産むがやすい’の構造～」

《問題提起》

- ・ことわざ群<‘案ずるより産むがやすい’／論より証拠>（『岩波ことわざ辞典』に掲載）は、人間の行動や心理に自ずと変容が生じることを謳っている点で共通している。
- ・こうした現象をアルバート・エリスの心理療法のビリーフの枠組みに照らしてみた場合、どのようなことが指摘しうるのか、を本発表では扱った。

《論理療法について》

- ・アルバート・エリスの現実場面での脱感作法は、“当たって砕ける”式で、エレベーターを恐れるクライアントを短期間に何度も何度もエレベーターに乗せる方法である。

《事例（池波正太郎『鬼平犯科帳』より）》

- ・鬼平犯科帳より、主人公長谷川平蔵の行動の危機的場面

《考察》

- ・「にやりと笑ってみた」（絶体絶命の窮地で平蔵の行動）ことで、<案ずるより産むが

やすい>などのラショナル・ビリーフに、平蔵の内面は変化した。行動の変容が心理的な変容を促した。

- ・気忙しい現在人が<ことわざ>を学ぶ恩恵とは、心には余裕、行動には臨機応変の柔軟性が生じることではないか。

研究発表② 鄭 芝淑氏 (ちよん じすく、鹿児島大学共通教育センター准教授)

「ことわざに現れる日韓の動物語彙比較」

1. 発表の目的

- ・日本と韓国のことわざに使われる動物に関する語彙を数量的に比較する。
- ・ことわざに現れる語彙を数量的に比較するために、ことわざスペクトルの概念に基づいて客観的に作成された日韓のことわざのPSリストを利用する。

【ことわざスペクトル】: ある文化のことわざの総体を、重みに関して同心円スペクトル状に分布することわざの集合ととらえ、ことわざスペクトルと呼ぶ。

【PSリスト】: ことわざのスペクトル的性質を反映した重み付けことわざリスト。

2. PSリストによる動物語彙の比較

- ・日本のPSリスト: 38冊の辞典から12,251件
- ・韓国のPSリスト: 28冊の辞典から8,446件

3. 日韓の動物語彙の比較

- ・(犬) 日韓のどちらにもよく用いられている。特に韓国では群を抜いて多い。「犬」が日本のことわざにおいて占める地位は、韓国の場合よりもはるかに低いことがわかった。それは、犬と人との関係において日韓間に大きな違いがあることを示唆している。
- ・(馬/牛) 「馬」は日本のことわざで最も多い。韓国では「牛」の方が多い。
- ・(虎) 虎はかつて韓国に数多く生息していたため、「虎」を含むことわざは韓国には多い。
- ・他には、(鼠) (鶏) (ロバ) (熊) (ノロシカ) (鳥) (猫) (鬼) (魚) (蛇) (猿) (虫) (烏) (鷹) (鶴) の比較をおこなった。

研究発表③ 時田 昌瑞氏 (ときた まさみず、日本ことわざ文化学会会長)

「新しい動物のことわざについて」

1. ことわざに新旧はあるか

- ・ことわざは『古事記』や『日本書紀』に載っており奈良時代からあり、時代とともに新しいことわざは増えていたというのが事実。

2. 「古くから」の指す時代とは?

- ・個人差があり、特定することはできない。本稿では明治期を新旧の変わり目と位置づけて論を進める。

3. 『ことわざのタマゴ』7章について

- ・7章は動植物に関するものに絞られており、7割以上が動物に関係している。

4. いかなるものがタマゴことわざか？

- ・ ことわざと認められていないものことわざの構成要素をもつものがタマゴことわざで、構成要素とは、「リズム感」「心地よく耳に響く」「納得と感ずるもの」と考える。
- ・ 外国のものでは、＜良きことはカタツムリの速度で歩く（ガンジー）＞など紹介され、日本のものでは、＜どじょうを殺して鶴を養う（福沢諭吉）＞などが多数紹介された。
- ・ 最後に、＜蝶にも毛虫の時がある＞＜森が海の魚を育てる＞を推奨して終りとする。

第2部・シンポジウム（14:10～16:00）

シンポジウム司会：時田昌瑞氏

◆なぜ動物を取り上げるのか

ことわざが森羅万象にかかわることはよく知られている。色々あるなかで動物が使われていることわざを＜動物ことわざ＞と呼ぶとすると、このジャンルに属することわざがジャンル別では最大のものになるとみられる。最大であるにも拘わらず、これまでシンポジウムのテーマとして取り上げていなかった。今回は、このテーマを取り上げてみたい。

シンポジウム① 馬場 俊臣氏（ばば としおみ、北海道教育大学札幌校教授）

「干支の動物に関することわざ」

1. 研究のきっかけ

ことわざの研究を行うきっかけは、平成21年度以降、北海道教育大学札幌校公開講座（一般市民対象）『文学に見られる身近な動物たち』という講座を担当するようになってからで、毎年、その年の干支にちなむ動物を取り上げ、その動物に関わる日本語の話題や日本のことわざに反映された動物に対する日本人の捉え方の特徴について話している。

2. 調査分析方法

『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』（小学館、2012年）の「見出しキーワード」検索利用、動物のどのような部分や行動に注目し、どのように捉えているかを分類

3. 動物に対する日本人の捉え方のまとめ

- ①馬（305句）価値が高い・優れている、無知、癖がある、臆病。
- ②犬（267句）忠実、従順、愛想、役立つ、頼りになる、理性がある、無能、理性がない、価値がない・価値が低い、卑しい、危険・危害を及ぼす。
- ③牛（322句）大きい、浅慮、すねる、努力、価値が低い、怠惰、遅い・のろい、長く着実
- ④蛇（183句）⑥猿（117句）⑦虎（110句）⑧兎（60句）⑨鶏（57句）⑩龍（51句）

4. ことわざに描かれた動物の生態

「馬は腹張れば暴れ、人間は腹減れば騒ぐ」

馬は胃が小さく嘔吐できないうえに腸が長く、腹痛（疝痛）を起こしやすい動物である。

「一鶏鳴けば万鶏歌う」

夜明けを告げるおんどり（雄のニワトリ）の鳴き声の順番は、集団の序列で決まっているという研究結果が発表されている。

5. 終わりに

ことわざや動物についていろいろなことを知り、その面白さ・楽しさを味わうことができ、この面白さ・楽しさを多くの人にも知ってほしいと強く思うようになっている。

シンポジウム② 渡辺 慎介氏（わたなべ しんすけ、横浜国立大学名誉教授）

「歌を忘れたカナリヤ」

鳥は日常的に見ることができる動物の一つである。都会で最も頻繁に見る動物は鳥であろう。この事情は、現代に限ったことではなく、明治、江戸、室町、鎌倉、平安の各時代、さらには、奈良時代に遡っても変わらないと推測される。江戸時代の俳句に「目には青葉山ほととぎす初鰹」（山口素堂）があることから、江戸や京でも普通に見られた。

<鳥とことわざ>

鳥をどのように読み込まれるかは、どのように見るかによって決まる。「鳥を食の対象」「愛玩の対象」「季節を詠む題材」「優れた（飛翔）能力を持つ動物」等、鳥をどのように見るにせよ、詠まれたことわざは何らかの『たとえ』になっている。

<食材としての鳥>

縄文時代の遺跡から鹿や猪や魚以外に、鴨の骨が発見されている。

<季節を詠む題材>

「目には青葉山ほととぎす初鰹」（山口素堂）江戸庶民に親しまれた初夏の句

「鎌倉を生きて出でけむ初鰹」（松尾芭蕉）「まな板に小判一枚初鰹」（室井其角）江戸時代には、非常に高価な食材であった。

<たとえに使われる鳥>

「雀百まで踊り忘れず」「雀の糠喜び」下に見られる鳥の代表はスズメ。良く見かけるものの、見栄えのしない小鳥であるため宿命なのかもしれない。

<高貴な鳥 ツルとタカ>

「鳶が鷹を生む」「能ある鷹は爪を隠す」タカは高潔な者、才能や実力のある者にたとえられている。

<結論 鋭い観察眼>

ホトトギスの食性、托卵、生態を先人はつぶさに観察している。この観察眼、客観的にものを見る姿勢は科学的な見方と言って過言ではない。

シンポジウム③ 三木 恒治氏（みき こうじ、岡山理科大学教授）

「ことわざに見る犬と人間の関係」

2018年は成年で、今回は犬に関する古今東西のことわざを調べた。参考としたのは一般的に出回っていることわざ辞典に限定しているが、犬ことわざの数量は他を圧倒して多く、良くも悪くも人間と犬の関わりの深さをうかがわせるものである。

ヨーロッパでは、犬は羊番や狩猟のアシスタントとして古くから人間とは切っても切れぬ関係であり、神話や文学にも反映されている。ギリシャ神話のケルベロスは地獄の番犬で、冥界から脱出しないように人間を見張っている。一方、叙事詩「オデュッセウス」で

は、長い旅から帰郷した主人を喜んで迎える。犬は人間にとって身近であると同時に脅威ともなる両極端な存在として扱われる。

(ドイツ) 「狂犬と酔っぱらいはよけて通せ」 (触らぬ神に祟りなし)

(ドイツ) 「死んだ犬は噛まぬ」 (死人に口なし)

(ロシア) 「犬と寝れば起きた時には蚤が一緒」 (朱に交われれば赤くなる)

イスラム世界では、犬は豚と同じく穢れた存在とみなされ、敬遠されてきた。

(パキスタン) 「犬になるとも弟になるな」 (長兄の権力の絶大さを伝える)

(アラブ) 「犬は一匹集まったとてガゼル鹿になれぬ」 (見た目の醜さを語る)

日本では、親しみが込められているものもあれば、ネガティブなもの、ポジティブなもの、忠実さを言い表しているものが散見される。狩猟牧畜生活で犬を飼いならす必要があったヨーロッパと違い、農耕社会である日本では、犬に対して緊迫感が希薄であったと感じる。

(日本) 「夫婦喧嘩は犬も食わぬ」 「犬猿の仲」

(日本) 「犬に論語」 「犬一代に狸一匹」

(日本) 「犬は三日飼えば三年恩を忘れぬ」

動物ことわざは人間を映す鏡であり、なかんづく犬に関するものは大きな部分を占めている。犬がどう扱われたかで民族の世界観がわかる。今回は限られた範囲であるが、地域の文化的特性を「犬ことわざ」を手掛かりに探った。

*

3人のパネリストの発表の後、パネリストの方々も壇上に並び、時田昌瑞氏の司会で、活発な意見交換がなされ、「動物とことわざ」の今次大会は終了した。

アンケート結果、「とても楽しい授業だった」「これからも参加したい」「研究者ではない自分には少し場違いであったが、知的に得られることが十分あって来てよかった」「動物と歴史がわかり面白かった」「いいテーマだった」「興味深く聴くことができた」「一般人には堅苦しかった」と、参加者の方々からコメントを確認させていただいた。

懇親会 (16:30~17:30) 司会：石原仁誌氏 (日本ことわざ文化学会理事)

今回の会場は明治大学リバティタワー17階学生食堂で開催された。1時間という短縮型で、乾杯の後、しばらくの歓談を経て、先ず自身の意向によって話したい人がスピーチをした後に、次に推薦された人がスピーチを行うといったリレー形式で進行し、時間内で、きちんと終了した。

以 上